

## 東京における降水日数からみた太陰暦日上の特異日 と季節の分類について\*

吉 持 昭\*\*

### 1. 緒 言

すでにわれわれは、太陰暦日にも特異日があることを知った<sup>1), 2)</sup>。

ここでは、東京における降水日を年間を通じて太陰暦の月日別に並べ変えて集計し、特異日を見つけだし、あわせて、太陰暦で集計した場合でも、太陽暦の累年平均と同様、季節の分類ができそうなことを述べる。

季節の分類には《春》とか《夏》の名称を与えず、単に番号にとどめたので、良い案があれば知りたいところである。この小文が長期予報の参考になれば幸である。

われわれは、統計上知り得た太陰暦の特異日が、どのような物理的機構で発生するかを知りたい。あるいは月の影響ではなからうか。

藤原咲平等<sup>3)</sup>は、月の地上気圧に及ぼす影響を調べ、朔望月つまり新月から満月になって、次の新月に至るまでの周期、近点月つまり月がその軌道上近地点から遠地点を通過して、再び近地点に至る周期、および赤緯月つまり月の赤緯が負から正になり正の極まで行き、それから引き返して正から負になり、負の極に達して引き返し、再び赤道を横切るまでの周期、いい変えると月の南中時における高度が大きくなったり小さくなったりする周期、以上3つの周期に分けて、各地の気圧を分析し、毎日の月の影響を算出し、等影響線を引くと、其の日の実際の天気図と似ており、天気予報に有効であるという。三宅恒夫・守田康太郎<sup>4)</sup>は海水の潮汐が、気象に及ぼす影響を調べ、大潮差8.7m、海抜69mに観測所のある仁川では、はっきりした差は認められないとしている。キングヘレ<sup>5)</sup>の総合報告によると、人工衛星の遠地点の変化から計算した地上20kmの大気密度の変化は、28日の周期の変動があり、これは太陰月による29日周期とは

別のもので、彼は太陽の地球に相対的な自転運動のためと強調している。この辺の事情は浅学な筆者にはわからないので、専門学者の批判、研究を待ちたい。

### 2. 調査方法

東京都気候表の日別雨量表を、太陰暦に並べ変えて、雨天日数を数える。期間は1889年から1960年までの72年間である。太陰暦の日付は、神宮暦にのっている旧暦を書き取った。年によっては旧暦の日付が出ていないので、これは暦法を天保暦によって、

- (1) 太陽と月の黄経が等しいときを朔とする。
- (2) 各宮の原点(0度, 30度, ……)に太陽があるときを中気とする。
- (3) 1日の始りは、京都の地方真太陽時の正子とする。
- (4) 朔のある日を月の第1日とする。
- (5) 冬至を含む月を11月、春分を含む月を2月、夏至を含む月を5月、秋分を含む月を8月とする。
- (6) うるう月は中気を含まぬ月にする。しかし、中気を含まぬ月が必ずしもみなうるう月とは限らない。というように決める。ただし、天保暦では時の始りは京都の地方時の夜半を採ってあるが、ここでは中央標準時を使う。

この暦法は正式には太陽太陰暦というのが本当であるが、俗に旧暦とか太陽暦と呼ばれている。したがってここでは単に太陰暦ということにする。

前に述べたように、月のうち朔のある日を1日とし、1日よりさらに前え4日までさかのぼり、月の終りも朔のある日から数えて33日までを採り、この日付にあわせて毎日の雨量を並べ、日量1.0mm以上の日数を調べた。うるう月の資料は含んでいい。

第1図は日付ごとに並べた雨日数の変化が示してあるが、太陰暦のひと月は29日の場合と30日の場合がある。この図には日付の31日を次の月の1日になるように月の前後が7日づつ重複するように描いてある。

### 3. 太陰暦日上の特異日

前の報告<sup>1), 2)</sup>では、雨の降りやすい日について出現確

\* On the Singularity and Seasonal Classification in Lunar Calendar at Tokyo in view of the Number of Day with Precipitation.

\*\* Akira Yoshimochi. 広島地方気象台  
—1962年4月4日受理—

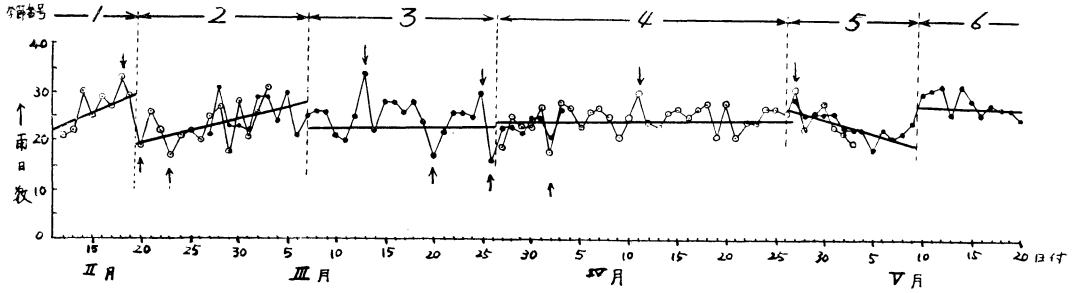
率を求め、前後の日の出現率との間に統計的に有意な差があるかどうか検定を行なった。

ここでも、特異日の定義については栗原宣夫<sup>6)</sup>が注意したように、毎年必ず現われるという性質のものではなく、前後の日に比べて多いか少ないかで判定した。

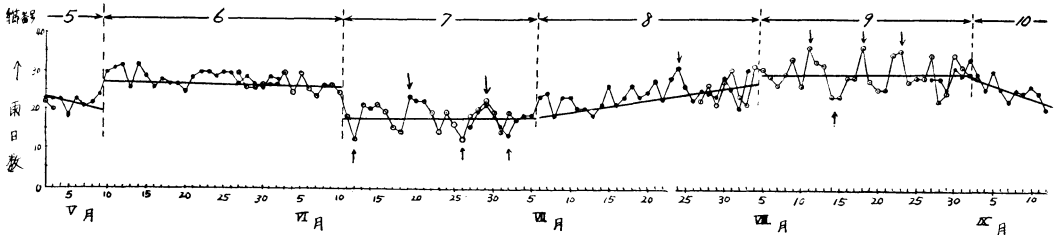
第1図の降水日数の変化曲線から目のこで印をつけてゆき、その日付を表にまとめたのが第2表である。した

がって、実はこのほかにも特異日があるかもしれない、また第1表に掲げたうちでも統計的に異常といえるかどうかかわからない。これは長期予報の参考程度<sup>7)</sup>の資料と思って手数をおこたっている。したがって、この結果を使う場合、統計学の検討をしていないので注意が必要である。

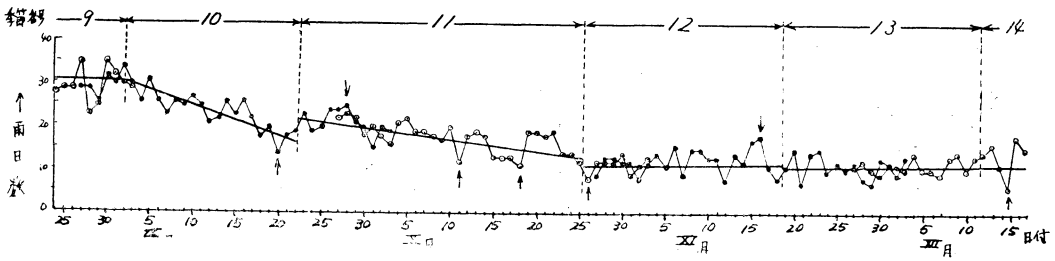
年間を通じて一番雨の降りやすいのは、8月11日、同



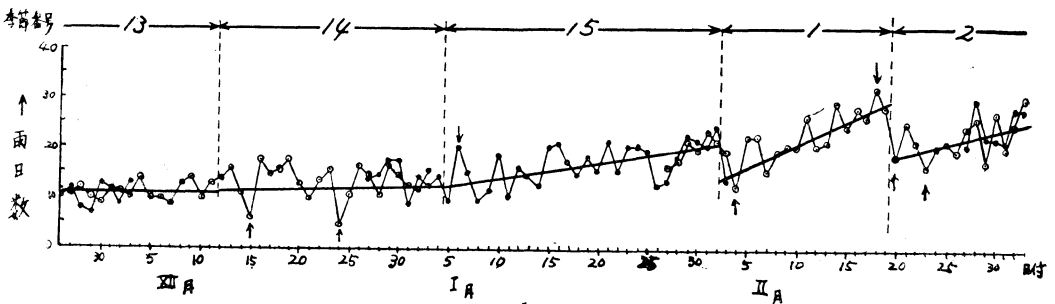
a 図



b 図



c 図



d 図

a~b 図 降水日数年変化図。黒い点は奇数月、点を丸で囲んでいるのは偶数月。点を指す矢印は上向が雨の少ない日、下向は多い日を示す。太い線は変化の傾向を現わし、点線は季界日、上の数字は季節番号。

第1表 特異日一覧表

降りにくい日	降りやすい日
2月4日	1月6日
2月20日	2月18日
2月23日	3月13日
3月20日	3月25日
3月26日	4月11日
4月2日	4月27日
6月12日	6月19日
6月26日	6月29日
7月2日	7月24日
8月14~15日	8月11日
9月20日	8月18日
10月11日	8月22~23日
10月18日	9月28日
10月26日	11月16日
12月15日	
12月24日	

第2表 季界日一覧表

季節番号	日付
14	2月2日
1	2月19~20日
2	3月7日
3	4月2日
4	4月27日
5	5月9~10日
6	6月10~11日
7	7月5~6日
8	8月4~5日
9	9月2日
10	9月22日
11	10月25~26日
12	11月19日
13	12月12日
14	

じく8月18日の72年間のうち37回であり、降りにくいのは12月24日の5回である。

#### 4. 太陽暦日上の季節の分類

坂田勝茂<sup>7)</sup>は、浜田の53年間の資料を使って各種気象要素の年変化を詳しく調べて、かなりはっきりした連続的な変り方をするところがあり、この変り目を季界日と名づけ、季節の分類を行なった。

ここでも坂田に習って、第1図の降水日数の変化曲線から季界日を探り出し、第2表にまとめてある。

季節の名称はたとえば、4月27日~5月9日は《さつきばれ》、5月10日~6月10日が《さみだれ》または《つゆ》、6月10日~7月5日が《まなつ》などと名づけることもできようが、筆者は文学方面にうといので、季節の番号を与えるだけにとどめた。

#### 5. 暦と季節の関係の問題点

暦としての必要な条件は、年々の日付が、気候によく合っていることである。

太陽太陰暦では季節の遅速を表わさないと意見がある。関口鯉吉<sup>8)</sup>は、月の満ち欠けや赤緯などが、気候に対して顕著な支配力を有するという学説は、単なる憶説の範囲を出ぬ迷妄の見(けん)であって、暦の構成に際してこのような説に準拠する必要は全くないといつてよいと述べている。

この関係は筆者にはわからないが、一方、わが国でも農漁村等ではまだかなり太陰暦を使っていたと推定される敗戦前(1945年より前)に集めた天気(俚)言をみても、たとえば<sup>9)</sup>《旧暦の毎月28日に雨降る時は翌月雨量多し》など、太陰暦に関するものはたくさんあってもうう月の前には季節は早くっていると、うう月の後は季節が遅れるというようなものは、筆者の調べた範囲ではわずかに青森県<sup>10)</sup>の《夏期に間あれば夏は遅れる》というもののひとつにすぎない。かえて山形県<sup>10)</sup>の《間ある年は上作も不作もなし》、《間の翌年は上作なり》、《間のかへりは箕で量れ》がある。

高橋浩一郎<sup>11)</sup>は、太陽暦における季節の分類を行なったが、これは6年間の各地の気象要素変化曲線や、天気図を参考にして季節の変りを調べたものである。このような調査方法だと、年による遅れ進みがあるので、年々の変動を平均値からの偏差の絶対値の平均をプラス・マイナスの符号を付けて表現している。これによると《春の入》は年によって30日ぐらいの季節の遅れ進みがあり、それ以外の季節でもだいたい10日以上、20日ぐらいの変動は並通のことらしい。高橋の方法で年ごとの季節を決め、それが太陽暦の日付と、太陰暦の日付で示した場合、遅速の多少によって、どちらが気候をよく表わすかがわかり、したがって関口の説に賛成または反論できようが、長年の資料を作らねばならないので、問題を出しただけでここでは立ち入らない。

#### 6. 結語

東京の観測資料から、太陰暦における特異日を捜し、また季節の分類もできそうなことを述べた。

特異日は降りにくい日が16個、降りやすい日が14個選り出している。これは統計の検定を行っていないので、理論的にはこの日があてはまらない場合もあろうし、またこのほかにもあるかもしれない。

季節の分類は14個に分けたが、季節番号を与えたのみにとどめた。

月の運行などについて広島地方気象台観測課長岩崎三雄氏に教えていただいた。記してお礼申し上げる。

#### 参考文献

- 1) 吉持昭(1960): 太陰暦3月15日東京の天気について、天気 7 142~145.
- 2) 吉持昭(1961): 太陰暦日上における2, 3のシンギュラリティー 天気 8 345~349.
- 3) 藤原暎平・大谷東平・野口篤実(1930, 1931): 月

- の気圧に及ぼす影響及びその天気予報における応用, 気象集誌. **8**, 221~231, 419~424; **9**. 125~128.
- 4) 三宅恒夫, 守田康太郎(1942): 潮汐により誘致される気圧変動, 海と空. **22**. 337~345.
- 5) D, G, King-Hele (1961): Satellites and the Earth's Outer Atmosphere. Q, J, R, Met., Soc. **87**. 265 281. [財団法人関西気象協会広島出張所発行. 気象学文献抄 **42**, (1961) による]
- 6) 栗原宣夫(1958): 月別気候統計に現われた特異日について, 天気. **5**. 251~255.
- 7) 坂田勝茂(1950): 新しい季節の分類について (第1報). 研究時報. **2**. 182~190.
- 8) 関口鯉吉(1947): 暦の編成に関する諸問題. 全国暦. 七星閣発行.
- 9) 高橋浩一郎, 古田美佐夫(1950): 季節予想に関する天気俚言(2), 季節予想の研究. 第2報. 気象研究所予報研究室竹平町分室発行.
- 10) 中央気象台(1943): 冷害に関係ある俚言, 中央気象台秘密気象報告. **2**. 390~400.
- 11) 高橋浩一郎(1955): 動気候学. 一とくに日本の天候について. 岩波書店. 59~63.

## 理 事 会 便 り

### 第6回 常任理事会議事録

日 時 昭和37年11月12日 (月) 17.00~20.30

場 所 神田学士会館

出席者 正野, 村上, 須田, 増田, 吉武, 桜庭,  
有住, 神山, 今井, 岸保, 淵 各理事, 藤田  
地方理事 (順序不同)

#### 決 議

1. 明年度春季大会を新潟市 (自治会館) で5月15, 16, 17日に開催し, 理事長より東管台長え正式に依頼する.
2. 評議員については18名の推せん候補者を出し, 全理事で6名連記で投票する.
3. 昭和38年度学会賞候補者推せん委員会審査委員は下記のとおりお願いする.  
 畠 山 久 尚 (委員長)  
 寺 田 一 彦  
 磯 野 謙 治  
 須 田 健  
 岸 保 勘 三 郎 (幹 事)
4. 昭和38年度文部省科学研究等分科審議会委員候補者に山本義一氏を推す.
5. ノート北海道地区編集委員は支部の要望によ

り田中文治氏に依頼する.

6. 12月3日日本生気象学会が発足するので理事長の祝辞を小平吉男氏に代読方依頼する.